

出光美術館研究紀要第三十一号抜刷  
二〇二六年三月二十五日発行

日本における中国北方産陶磁器の  
流通と伝世に関する一考察

—— 磁州窯系製品を中心に

徳留大輔



# 日本における中国北方産陶磁器の流通と伝世に関する一考察

——磁州窯系製品を中心に

徳留大輔

はじめに

- 一、生産地の状況に関する研究略史
- 二、日本列島出土の磁州窯系陶磁
- 三、日本列島における磁州窯系陶器の受容の様相  
まとめにかえて

はじめに

日本には数多くの中国陶磁器が流通しており、その多くは景德鎮窯、龍泉窯、福建諸窯のいわゆる南方産の製品が中心である。その背景としては、中国における交易の窓口機関である市舶司が、日本向けは浙江省の寧波（慶元）に設置されていたことにある。

しかし、その一方で数量は決して多くはないが、邢窯や定窯系、時期が下るにつれて耀州窯系や磁州窯系などの華北地域に所在する窯の製品も日本へ伝わっている。なかでも磁州窯系陶器は、日本に舶来している数量や種類も比較的豊富であり、茶の湯の道具として見立てられる作品

もある。

華北産の製品の多くは、北方地域だけでなく南宋の都・杭州をはじめ南方の都市に流通し、その後、寧波を経て日本列島に伝わったものも多いと考えられるが、中国国内における磁州窯系製品の流通の問題を考えると、日本列島に舶来した磁州窯系製品の種類や時期を検討することは重要である。

そのため、筆者は現在、日本列島で出土している磁州窯系をはじめ華北産の製品の集成を進めている。今回はその途中の経過を踏まえて、列島で出土している磁州窯系製品の特徴や傾向を紹介することにした。ただし、現在資料集成を行っている段階で、多くは先行研究や発掘報告書記載の情報をもとにしている。このため磁州窯系陶器の製作技術や文様が伝播していたと考えられる江西省の吉州窯における南宋代から元代の釉下彩の鉄絵や緑釉陶器、福建の晋江磁窰窯や武夷山五渡橋窯などに関しては、報告書の図版や写真では判断できないこともあり、今後実見を経て判断したいが、本論では必要に応じて、これらについても取り上げることにした。

## 一、生産地の状況に関する研究略史

### (1) 磁州窯の特徴と技法に関して

磁州窯は、一般に民間用として流通する陶磁器を生産していた窯場として知られている。しかし、北宋後期から金代、元代にかけては、その一部の製品が宮廷に貢納された、あるいは御用に供された可能性があることが、考古資料をもとに指摘されている〔註1〕。また、明代においても、『彰徳府志』巻三「地理志」の記載から、磁州窯製品の一部が貢納品として宮廷に供されたことが知られている〔註2〕。

磁州窯およびこれと類似した特徴を有する陶磁器は、磁州窯本体にとどまらず、河北・河南・山西・山東・安徽・陝西・寧夏・北京・内蒙古・遼寧など、広範な地域に分布している。その中でも、河南・山西・河北を中心とする華北地域に集中的に分布することはよく知られており、これらの製品群は一般に「磁州窯系」あるいは「磁州窯類系」と総称されている〔図1〕〔註3〕。

### (2) 磁州窯系の装飾技法

磁州窯系の名称の中心となる磁州窯は、河北省邯鄲市磁県觀台鎮に所在し、五代末から北宋初期にかけてが主な操業期である。元代から明代にかけては、その生産の中心が觀台鎮から、同じく磁県の彭城鎮へと移行している〔註4〕。伝世品および出土品を含めて磁州窯系全体を俯瞰すると、その装飾技法は五十八種類にも及ぶと指摘されている〔註5〕。

秦大樹氏らは、窯址出土資料の検討にもとづき、磁州窯系製品の基本的な特徴を整理している〔註6〕。それによれば、磁州窯系製品の多くは

胎土の表面に白化粧を施す点を共通の特徴とする。また装飾方法は、①器面への装飾、②器胎(素地)への装飾、③彩絵装飾、④釉上装飾、⑤彩釉装飾の五類型に大別され、それぞれがさらに細分可能であるとされている〔表1〕〔註7〕。

これらの装飾技法の通時的変化に着目すると、磁州窯では当初、白無地(白釉磁)、白地緑彩、白地褐彩、素胎黒釉彩、白地線彫(劃花)、白地搔落、白地魚子文、黒釉磁などが主に生産されていたことがわかる。北宋から金代にかけては、白地黒搔落、白地鉄絵、絞胎(練り込み)、黒釉白堆線、黒釉飛鉋文、さらに緑釉を施した装飾技法などが新たに加わった。金代から元代にかけては、紅緑彩(日本では赤絵とも称される)、黒釉鏤花、緑釉、三彩、翡翠釉などが生産されるようになる。さらに元代以降になると、白地鉄絵、白地鉄絵褐彩、白釉磁、黒釉磁などが主流となり、明代には白地鉄絵に翡翠釉を施した作例も知られている。加えて、明代末期の磁州窯における白地鉄絵碗・鉢のなかには、日本の茶の湯の世界において「絵高麗」と称される作例も確認されている〔註8〕。

これら磁州窯系の窯の特徴として、施文技法や文様は広く共通している一方で、各窯や地域で少しずつ胎土や釉色の雰囲気や異にしており、磁州・觀台窯の製品と類似したものを生産する窯と類似しながらも独自

①器面装飾 (化粧土を含む)	劃花、刻花、印花、剔花など
②器胎装飾	型作り、型押しなど
③彩絵装飾	白地黒花、白地絵劃花など
④釉上装飾	白釉緑彩、白釉醬彩、紅緑彩など
⑤彩釉装飾	主に低火度彩釉(緑釉、黄釉、黄緑釉など)

表1 磁州窯系製品の装飾方法(秦大樹など2021)

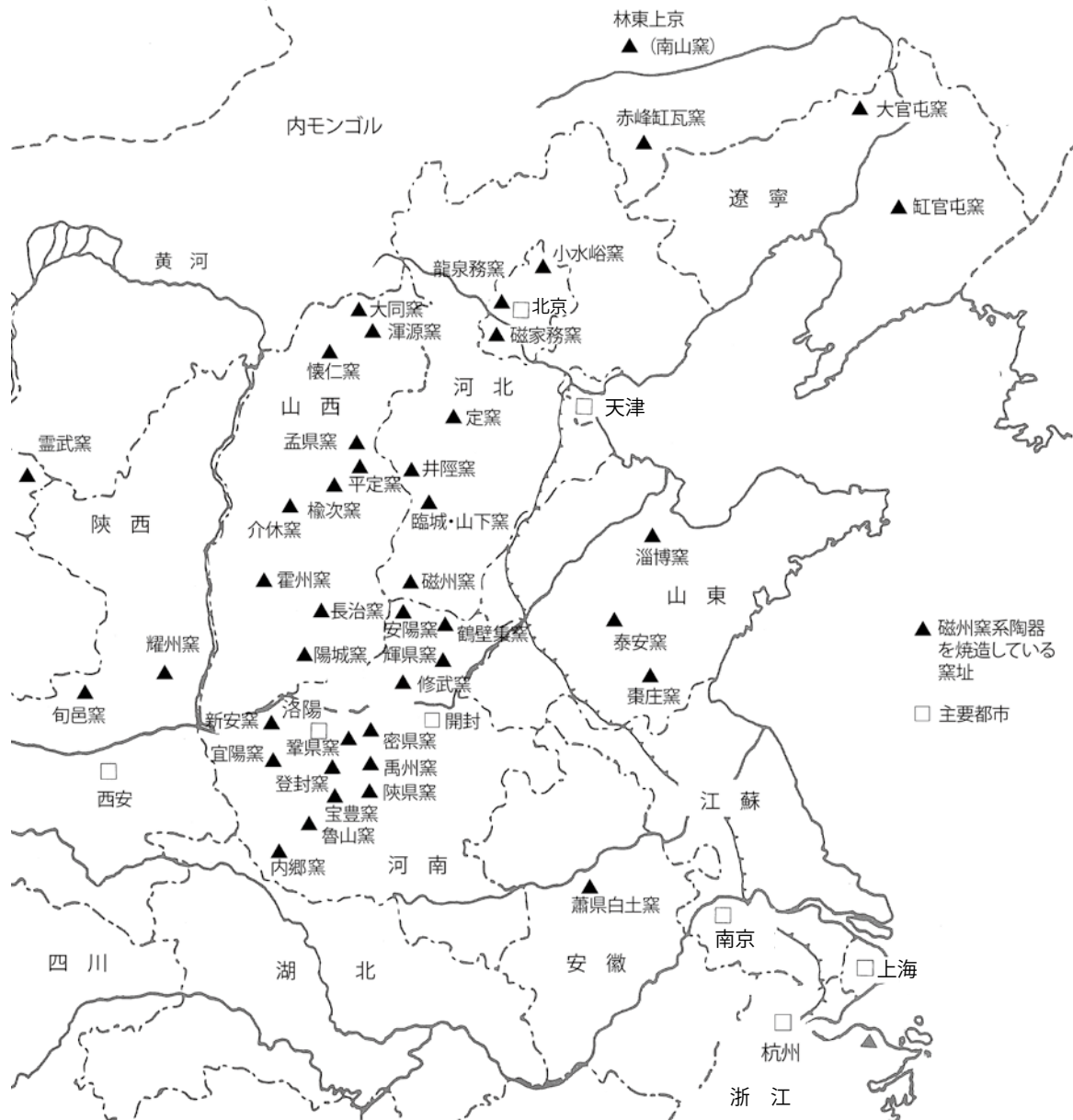


図1 磁州窯系陶器を焼造する窯址の分布

性がみられる地域・窯があることが指摘されている〔註9〕。また磁州窯系の製品を作りながらも、とくに宋・金・元時代では耀州窯系青磁、鈞窯系の製品、定窯を模倣した白磁、黒釉の製品なども焼造していることが知られている〔註10〕。

磁州窯系諸窯の特徴として、施文技法や文様構成が広く共有されている一方で、各窯や地域ごとに胎土や釉色の風合いには微妙な差異が認められる。すなわち、磁州・観台窯の製品に近似した作風を示す窯が存在する一方で、共通性を保ちつつも独自性を備えた地域・窯も存在したことが指摘されている〔註11〕。また、磁州窯系製品を主として生産する窯であっても、とくに宋・金・元代には、耀州窯系青磁、鈞窯系製品、定窯を模倣した白磁、黒釉製品など、他窯系の製品を併焼していたことが知られている〔註12〕。

### (3) 装飾技法の詳細

本節では、日本に舶来している磁州窯系製品の装飾技法について、やや詳しく確認する。なお、磁州窯系の製作技法については、馬小青氏によって体系的な整理がなされており、本節の記述も基本的にその整理を参照している〔註13〕。

#### ・白無地（白地無地）〔図2〕

灰色あるいは褐色の素地の上に白土による白化粧を施し、その上から透明釉をかけて高火度で焼成したものである。本技法は、磁州窯系陶器を特徴づける最も基本的な装飾技法の一つである。なお、この技法は唐代初期には河南省の鞏義窯や白河窯ですでに採用され、晩唐から五代にかけては河南一帯の窯場で広く用いられていたことが知られている〔註

14〕。

#### ・白地緑彩・白地褐彩〔図3〕

いずれも素地に白化粧を施し、透明釉をかけた上で、緑彩には酸化銅、褐彩には鉄系顔料を用いて装飾する技法である。斑点文、梅花文、三葉文などの文様が表される。

#### ・白地線彫（劃花）〔図4〕

白化粧を施した器面を半乾燥状態で素地まで彫込む線彫技法である。磁州窯系製品では、灰色または褐色を呈する胎土が文様として浮かび上がる点に特徴がある。

#### ・白地線彫魚子地

金銀器にみられる鑿技法に倣った装飾である。魚子地が主文となる例は少なく、花卉文・動物文・人物文・文字などを主文様とし、その周囲の余白部分に真珠状の小円文を充填する構成が一般的である。本技法は晩唐から五代にかけて河南省密県西関窯で出現し、その後、河北省観台鎮窯、河南省修武当陽峪窯、新安窯、鞏義芝田窯、登封曲河窯、宜陽窯、宝豊清涼寺窯、魯山段店窯など、各地の窯場で採用された。

#### ・白地搔落（剔花技法）〔図5〕

磁州窯系における精緻な装飾技法の一つである。素地に白化粧を施し、乾燥前に文様の外郭を線彫りしたのち、余白部分の白化粧を搔落として素地の灰色または茶褐色層を露出させ、透明釉をかけて高火度で焼成する。素地と白化粧土の色調・質感の差によって文様が際立つ点に特徴がある。より深く搔落とす浮彫風の作例は比較的早期にみられ、浅い搔落による作例も存在する〔註15〕。前者は登封曲河窯、白沙窯、密県西関窯など、河南地方の窯場に限られるとの指摘もある〔註16〕。

・白地黒搔落〔図6〕

白化粧を施した器面の全体または一部に鉄絵具をかけ、文様を線彫りした後、文様以外の部分の鉄絵具を搔落として下層の白化粧土を露出させ、透明釉をかけて高火度で焼成する技法である（剔花技法）。この技法は鉄絵具以外の色釉にも応用され、鉄絵具の場合は白地と黒釉との強い対比によって文様が表現される。観台鎮窯址では北宋初期に出現し、北宋中・後期から金代前期、すなわち十一世紀から十二世紀末にかけて主に用いられた〔註17〕。劉濤氏によれば、搔落技法は宋・遼・金代に、河南省密県西関窯、登封曲河窯、魯山段店窯、宝豊清涼寺窯、新安城関窯、修武当陽峪窯、焦作鉞山窯、鶴壁集窯、河北省磁県観台窯、定窯、山西省介休洪山窯や渾源界庄窯、さらに遼寧省遼陽江官屯窯や内蒙古赤峰缸瓦窯などで確認されている。搔落技法には、白地搔落（胎地剔白花）、白地黒搔落（白地剔黒〔赭〕花）、黒〔赭〕地剔白花、低火度釉剔花などが含まれるが、白地黒搔落は磁県観台鎮窯と修武当陽峪窯で主に焼造されたことが明らかにされている〔註18〕。

なお、米国ネルソン・アトキンソン美術館所蔵の「劉家造」銘龍文長頸瓶や、白鶴美術館所蔵の白地黒搔落龍文瓶は、いずれも観台鎮窯の製品と考えられている。

・白地鉄絵〔図7〕

白化粧を施した器面に筆で鉄絵具を用いて文様を描き、透明釉をかけて高火度で焼成したものである。文様には花卉文、龍文、鳳凰文のほか、文字文様も含まれる〔註19〕。磁県観台窯では北宋末期に出現し、金代以降に多く焼造され、元代に入ると彭城窯をはじめ、各地の磁州窯系窯場で広く生産された。なお、十一世紀中頃以前の北宋中期には、観台窯で

白地に緑彩や褐彩を施した作例がみられ、これらが白地鉄絵の先駆的段階であった可能性が指摘されている〔註20〕。

・白地鉄絵線彫〔図8〕

基本的には白地鉄絵技法による装飾であるが、鉄絵具で文様を描いた後、先端の鋭い工具を用いて、花卉文の花芯や葉脈、あるいは龍・鳳凰文の細部を線彫りする点に特徴がある。観台鎮では、白地鉄絵と同様に北宋末期から金代にかけて出現している。

・黒釉〔図9〕

素地に黒釉を施し、高火度で焼成したものである。北宋初期から現代に至るまで継続的に生産されてきた。黒釉盤の内面中央に釉がかららず、灰色の素地が露出する作例も知られている。なお、馬小青氏の分類ではさらに細分され、黒釉油滴、黒釉禾目などもこの範疇に含まれる。

・黒釉白縁〔図10〕

素地に黒釉を施した後、口縁部などの黒釉を削り落とし、白化粧土と透明釉による白釉をかけて高火度で焼成したものである。日本では白覆輪とも称され、碗類に多くみられる。

・黒釉堆白〔図11〕

素地が乾燥した後、器面に二本または複数の連続線を白色泥で施し、その上から黒釉をかけて高火度で焼成する技法である。日本列島では出土例がきわめて少ないが、近年、京都府舞鶴市所在の満願寺から出土したことが報告されている。

・緑釉〔図12〕

素焼き後、酸化銅を呈色剤とする鉛釉を施し、低火度で焼成したものである。白化粧を施さずに緑釉をかけたものは深緑色を呈し、白化粧



图3 白地綠彩(白釉綠斑)文水注 磁州窯系 中国 北宋時代 高 16.2cm 出光美術館



图2 白釉瓜形水注 磁州窯系 中国 北宋時代 高 25.6cm 出光美術館



图5 白地搔落牡丹唐草文壺 磁州窯系 中国 北宋時代 高 21.8cm 出光美術館



图4 白地線影牡丹文梅瓶 磁州窯系 中国 北宋時代 高 40.3cm 出光美術館



图7-1 白地鉄繪(黒花)草花文梅瓶 磁州窯系 中国 金時代 高 47.0cm 出光美術館



图6 白地黒搔落牡丹唐草文枕 磁州窯 中国 北宋時代 30.4 × 29.2cm 出光美術館



図8 白地鉄絵（黒花）線彫龍文壺 磁州窯系 中国元時代 高 26.1cm 出光美術館



図7-2 白地鉄絵（黒花）花卉文壺 磁州窯系 中国元「至正十一年」（1351）銘 高 34.4cm 出光美術館



図10 黒釉白縁（白覆輪）碗 磁州窯系 中国金時代 径 15.0cm 出光美術館



図9-1 黒釉吐魯瓶 磁州窯系 中国北宋「宣和元年」（1119）銘 高 23.1cm 出光美術館



図9-2 底部裏



図12 緑釉刻花詩文枕 磁州窯系 中国金時代 39.0cm × 24.3cm 出光美術館



図11 黒釉堆線文双耳壺 磁州窯系 中国金時代 高 24.5cm 出光美術館

を施した素地に緑釉をかけたものは、化粧土が透けることで青緑色となる。緑釉製品には、施釉前に線彫を行う緑釉線彫、型押しによる緑釉印花、白地鉄絵と同様の工程で制作した後緑釉を施す緑釉白地鉄絵などのバリエーションがある。

・翡翠釉〔図13〕  
孔雀(藍)釉とも称される彩釉で、銅を呈色剤、硝酸カリウムを溶媒剤として用い、主として白地鉄絵製品に施釉し、低火度で焼成される。孔雀釉製品は、観台・臨水をはじめ、河南省焦作、禹県(現・禹州市)扒村などの窯址から磁片が確認されているほか、山西省中南部も主要な生産地の一つとされる。金代にはすでに出現しているが、出土例の多くは元代以降に集中している。

・絞胎(練上げ)  
絞胎は唐代に出現し、宋・元代にかけて北方地域を中心に焼造された技法である。主な窯址としては、河南省鞏義芝田窯、登封曲河窯、魯山段店窯、宝豊清涼寺窯、禹県鈞台窯、新安城関窯、修武当陽峪窯、焦作鉞山窯、恩村窯、王庄窯、西王封窯、牛店窯、山西省太原孟家井窯(榆



図13 翡翠(孔雀)釉黒花牡丹唐草文梅瓶 磁州窯系  
中国 元~明時代 高24.2cm 出光美術館

次窯)、山東省淄博大街窯、淄川磁村窯などが知られ、いずれも宋・元代に盛行している。

宋・金代の絞胎器は、唐代の作例と比較して器形が大きく異なるだけでなく、主として二つの点で相違が認められる〔註21〕。第一は材質であり、唐代の絞胎器が主に陶質で低火度焼成の色釉を施すのに対し、宋・金代のものは高火度焼成の施釉磁器が主体となる。第二は製作技法および文様である。唐代には象嵌技法による団花文や菱花文がみられるが、これらは宋代以降には確認されない。一方、宋・金代の絞胎器に特徴的な羽毛文や編織文は、唐代の絞胎器には見られない。

## 二、日本列島出土の磁州窯系陶磁

日本列島出土の磁州窯系陶磁については、長谷部楽爾、田中克子、森本朝子、守屋雅史、鈴木裕子各氏による研究がある。本節では、これら先行研究の成果に加え、筆者が集成作業の過程で追加したデータも踏まえつつ、出土状況の特徴を検討する。

ただし、遺跡出土資料の中には、遺跡・遺構の時期、ならびに陶磁器の使用・廃棄年代が必ずしも明確でない事例も少なくない。そこで本稿では、鈴木氏が動態把握のために用いた枠組みに倣い、時期を大きく①西暦一〇〇〇年前後から一三〇〇年頃(概ね十一~十三世紀)、②一三〇〇年から一五〇〇年頃、③十六世紀以降の三期に区分して、その様相を概観する〔註22〕。また、磁州窯系陶器についても他の中国陶磁と同様に、福岡市の博多遺跡群において出土数・器種ともに最も豊富である。したがって、まず博多遺跡群における推移を確認した上で、続いて他地域の

出土状況を検討する。

(1) 一一〇〇年前後から一三〇〇年頃の様相

(1) — 1、博多遺跡群

当該期における博多遺跡群出土の磁州窯系陶器については、森本朝子氏により、およそ一一〇〇年頃から一一五〇年頃、ならびに一一五〇年頃から一二〇〇年前後の二期に区分できることが指摘されている〔注23〕。本節でも基本的にこの成果を援用するが、博多遺跡群以外の出土事例を考慮し、本稿では下限年代を一三〇〇年頃まで含めて検討する。

一一〇〇年頃から一一五〇年頃にかけては、器表に白化粧を施し、透明釉をかけた無文の陶器が多数を占める(附図1—1—4、6—8)。碗類の内底には目跡が認められるが、トチンによる目跡と支え釘(ピンのような形態の窯道具)による目跡があり、それが時間の変化を示す可能性が指摘されている〔註24〕。白地無文の作例に加え、刻花文を施したものが確認される(附図1—6、7)。また、胎土に白化粧を施した上で鉄絵具により文様を描いた白地鉄絵瓶(附図1—9)、器全面に黒釉をかけた後、搔落によって文様を施した白地黒搔落瓶(附図1—11)、さらに白化粧の上から緑釉を施した作例(附図1—10)も出土している。

このほか、白地鉄絵瓶と同一の包含層から、暗褐色の釉を施した騎馬人物を表す陶器が出土している。体長五・一センチメートル、高さ四・四センチメートルの小品であり(附図1—35)、報告書では山西省臨汾・龍洞窯産である可能性が高いとされている〔註25〕。さらに、本来は蓋を伴うと考えられる碗も含まれ、外面に柿釉、内面に白釉を施した作例(附図1—5)や、刻花文を施した蓋(附図1—7)などが確認される。

十二世紀中頃になると、仿定窯系の作例が碗・鉢類や蓋托類にも見られるようになる(附図1—12—25)。この時期の特徴として、器面の一部に黒彩・褐彩あるいは緑彩を施した作例が多い点が挙げられる(附図1—12—15、17—19)。また、内外面ともに黒釉を施した碗類も多数確認される(附図1—21—25)。このほか、絞胎による碗・鉢類(附図1—27)も出土している。なお、附図には示していないが、仿定窯系の口禿げ皿も出土しており(博多71次など)、当該期における器種の多様化がうかがえる。

十一世紀から十三世紀前半にかけて、磁州窯系製品では搔落技法による装飾が盛行するが、その傾向は本期後半においても継続して認められる。具体的には、白地黒搔落技法の上に緑釉を施した梅瓶の蓋(附図1—29)や、白地鉄絵線彫に緑釉を施した梅瓶(附図1—33)などが挙げられる。一方で、白化粧を施した器面に線彫を加え、緑釉を掛けた作例の中には、磁州窯系製品と断定できないものも少なくなく、南方産陶磁器との判別が困難な事例も含まれる(附図1—32、33)。また、かつて磁州窯系と考えられていた作例の中には、現在では福建省武夷山五渡橋窯産とみなされているものも知られている(附図1—34)。

(1) — 2、博多遺跡群以外

まず、博多遺跡群以外の福岡県内遺跡の状況を確認する。福岡市所在の吉塚遺跡(第3次調査)では、十二世紀前後の井戸上面の包含層から白地線彫による梅瓶片が出土している(附図2—1)。本作例は、線彫による文様が細いながらも明瞭である点に特徴があるが、日本列島内における類例は多くない。窯址資料との比較からは、河南省登封窯や山西省

介休窯などに類似例が認められる「註26」。また、同じく福岡市の箱崎遺跡(第52次調査)からは、百合口黒線彫瓶が確認されている(附図2-12)。さらに、柳川市西加蒲池池淵遺跡からは、全国的にも例の少ない金代の三彩が二点出土しており、同一個体と考えられている(附図2-13)。この三彩は、濃緑色・茶色・黄色の鮮やかな発色を示し、花文と思われる文様が線刻および黒色釉によって表されている。

次に、鹿児島県万之瀬川流域の状況をみる。同流域には中世遺跡群が分布し、磁州窯系製品を含む多数の中国陶磁器が出土している。十二世紀中頃から十三世紀前半にかけて交易拠点であったと評価される南さつま市の持鉢松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡からも、磁州窯系、あるいはその影響を受けた南方産陶器が確認されている。持鉢松遺跡では、磁州窯観台窯をはじめ、河南省密県、登封、魯山などの窯で焼造されたと考えられる白地線彫魚子地瓶片が出土している(附図2-14)。また、博多遺跡群でも確認されているが、渡畑遺跡および芝原遺跡からは、胎土がやや茶褐色を呈し、白地搔落によって文様を施した、福建省武夷山五渡橋窯産とみられる壺片も出土している(附図2-15, 6)。

京都では京都市内周辺では鳥羽離宮跡、平安京跡や仁和寺院家跡などから白地黒搔落と緑釉白地黒搔落による壺と梅瓶や枕などの破片が確認されている(附図2-17)。附図2-17の①④、⑥⑦⑨は磁州窯の白地黒搔落の典型作といえる。ただ附図2-17①は広口壺状で、頸部にも黒搔落により装飾が行われている珍しい事例である。また他の地域ではほとんどみられないことのない緑釉白地に印花象嵌による文様が施された枕(附図2-17⑧)が検出されている。なおこの絞胎(練り上げ)による薄板の象嵌と印花の技法を用いた作例は、中国の河南省の地域に広が

る磁州窯系の製品を焼造する窯(例えば修武当陽峪窯)で生産されたものと考えられる。また京都の舞鶴市では、一二一九年に創建された満願寺跡から黒釉白堆線文壺(附図2-18)が出土している。なおこの技法を用いた作例

の製品はいまのところ平安京や博多などでもみられない珍しい事例である。滋賀県大津市の上仰木遺跡は、比叡山への参詣路に位置する中世の居館跡である。附図2-19に示した出土品は、整地に伴って形成された平安期の廃土層を含む包含層から出土したものである。附図2-19①は、緑釉白地搔落牡丹文梅瓶の破片であり、類例としては出光美術館所蔵品「口絵・図14」や大英博物館所蔵品が知られている。附図2-19②は、線彫によって唐草文を表した素三彩で、内面にはやや白濁した透明釉が施されており、河南省当陽峪窯の三彩製品に類似する。附図2-19③は白地鉄絵瓶片、附図2-19④は肩部に稜をもつ水注片で、白化粧の上に鉄絵と線彫によって蓮弁文および唐草文が表されている。この④については、福建省武夷山五渡橋窯産の可能性が高いと考えられる。

日本列島における最北端の出土例としては、岩手県平泉遺跡群が挙げ



図14 緑釉搔落牡丹唐草文瓶 磁州窯 中国  
北宋時代 高54.5cm 出光美術館

られる(附図2-11)。白磁・青磁と比較すると出土点数はきわめて少ないものの、倉町遺跡からは緑釉を施した白地鉄絵壺が出土している。ただし、これらについては武夷山産である可能性も指摘されている[註27]。なお後述するが、青灰色の胎土に白化粧を施し、線刻によって牡丹文を表し、牡丹文内部に緑釉、その他の部分に鉄釉を刷毛塗りした梅瓶が、長野県塩尻市吉田川西遺跡から出土しており(附図2-10)、これについても武夷山五渡橋窯産の可能性が考えられる。また、白地黒搔落あるいは鉄絵とみられる作例も知られているが、これらは奥州藤原氏滅亡後の十三世紀代に位置づけられる可能性がある。

#### (1) 3、小結

十一世紀から十三世紀にかけては、博多および京都とその周辺地域を中心に、磁州窯系陶器が流通していた。博多遺跡群は出土数・器種ともに豊富であり、瓶・壺類に加えて、碗・鉢・杯托なども確認され、白地・黒釉・緑釉を施した作例が多い点の特徴である。これら碗・鉢・杯托類は、博多遺跡群の中でも、唐人商人の活動が想定される地点に出土が集中する傾向が指摘されている[註28]。

一方、京都およびその周辺地域では、壺・瓶類に加え、枕などの特殊器種が出土している反面、磁州窯系の碗・鉢類は少なく、この点は博多の様相と大きく異なる。さらに九州では、福岡地域のみならず、南島交易の拠点と目される鹿児島県万之瀬川流域においても、壺・瓶類が出土している点は注目される。

#### (2) 十四世紀から十五世紀の様相

本節では、十四世紀から十五世紀頃における各地の出土状況を概観する。この時期には、鉄絵具による筆書きで器面を装飾する白地鉄絵の作例が顕著に増加する。

#### (2) 1、博多遺跡群

当該期の博多遺跡群出土品は、基本的に白地鉄絵による装飾を有するが、器形は大きく四類型に分けられる。

第一は碗・鉢および盤類である。これらは、内面に鉄絵具(褐彩を含む)で文様を描き、外面に鉄釉を施す作例もみられる(附図3-1-5、24、25)。なお附図3-5は内外面ともに鉄釉を施す。多くの作例では、器内面の口縁下部に圈線をめぐらし、その下に波文を表す。見込みが広いものでは、さらに花卉文や唐草文(附図3-3、4、24、25)、あるいは魚文(附図3-27)などが描かれる。また、鏝縁状の口縁をもつ作例も確認される(附図3-24、27)[註29]。

第二は瓶類である。ただし瓶類は類例・数量ともに少なく、現時点では白地鉄絵双耳瓶一例が確認されているにとどまる(附図3-30)。

第三は、いわゆる「酒会壺」形に類似する直口・広口の壺類である(附図3-6、23、26、29)。壺類は他器種に比して大型であるが、底部に着目すると大型(附図3-29)と小型(附図3-7、26)の別が認められる。遺跡出土の壺片が多い要因としては、一個体あたりの破片点数が増えやすい点も考慮すべきであるが、それを踏まえても、口縁部や底部が確認される個体数は当該期以前より増加している可能性がある。文様としては、龍鳳鳳文(龍の胴部鱗が確認できる)(附図3-6、21)や、胴部に窓状区画を設け、その内部に花卉文を表すもの(附図3-7、15、17、18、23)

などがみられる。また白地鉄絵の上に翡翠釉を施した作例も確認される(附図3-6、19)。

第四は枕であり、出土例は少ないものの一例が確認されている(附図3-28)。

この他、吉州窯系の鉄絵の製品もよくみられる(附図4-10)。

## (2) 2、博多遺跡群以外

博多遺跡群以外では、九州各地および沖縄において出土量が増加するほか、京都や鎌倉でも比較的まとまった出土が確認される。この時期の特徴として、京都を除く多くの地域で、出土品の中心がほぼ「酒会壺」形の壺類に限られる点が挙げられる。

### (2) 2-1、九州地方

九州では、福岡市箱崎遺跡群(附図4-1-3)、大宰府(附図4-4)、熊本県阿蘇・一関祇園(附図4-5)、佐賀県小蘭城(附図4-7)、宮田A(附図4-8)、長崎県対馬の都城跡(附図4-9)などから白地鉄絵壺が確認されている。いずれも大型の壺である。このうち翡翠釉を施した作例は博多42次(附図3-6)や大宰府条坊(附図4-4)などがある。

とりわけ注目されるのは、一関祇園出土の白地鉄絵壺である。胴部文様は全体として簡略であるが、上部に鳥文が表されている。さらに本作例は、使用中に少なくとも一度破損したとみられ、漆による接着補修が施されている。出土状況からは、当該遺跡で大型建築を造営する以前に、地鎮のため土壇に納められた可能性が指摘され、壺内には宋銭が伴出(埋納)していたとされる。本遺跡は、鎌倉から室町期(十二世紀後半〜十

四世紀後半)にかけての遺跡であり、阿蘇地方を支配した阿蘇氏(大宮司職)の南阿蘇地方における館跡と考えられている[註30]。以上より、本作例は単なる容器としてではなく、装飾性を含めて価値ある器物として取り扱われていた可能性が高い。

なお、大分県の府内町跡からは、博多(附図3-1、2)でみられたものと同様の白地鉄絵碗が確認されている(附図4-6)。

### (2) 2-2、沖縄地方

沖縄地方では、久米島町具志川城跡や首里城跡でまとまって出土している。具志川城跡では、肩部に菊花文や渦巻状の雲文様をもつ比較的大型の白地鉄絵壺(附図5-1-3)や、内外面黒釉の壺(附図5-4、7)が確認される。

沖縄本島では、今帰仁城跡から翡翠釉を施した壺の口縁部が出土している(附図5-7)。一方、磁州窯系陶器の出土は主として首里城跡の各地点に集中する。壺類は、木曳門地区(附図5-8-11)、銭蔵東地区(附図5-12)、淑順門西地区南区(附図5-13)、右掖門地区(附図5-18-20)、漏刻門地区(附図5-16-21)などから出土し、いずれも白地鉄絵壺である。このうち淑順門西地区南区出土例には翡翠釉が施されている。右掖門地区では、福建省徳化窯など十七〜十八世紀陶磁が多量に出土する層位の中から、十四世紀頃の白地鉄絵壺が確認されている例もある。

また本稿では詳細を扱わないが、十五世紀中頃の首里城二階殿地区では、おそらく十二世紀から十三世紀頃に位置づけられる、搔落文様を施し内面に黒釉を掛けた梅瓶が出土している[註31]。首里城は十四世紀末頃の築城とされることから、これらの器物は築城以前の製品である可能

性が高い。したがって、十二世紀から十四世紀の段階で磁州窯系陶器が沖繩地方にも流通しており、伝世品として継続使用されていた可能性も考えられる。

(2) — 2—3、九州・沖繩地方以外

京都・鎌倉では複数がまとまって出土する一方、その他の地域では散発的に白地鉄絵壺類が確認される。

西日本からみると、広島県草戸千軒町遺跡では肩部に菊花文を施した作例(附図6—1)、島根県益田市沖手遺跡では内面に鉄釉を施した白地壺の底部(附図6—2)、大阪府西浦門前遺跡では短頸の白地鉄絵壺および鉄絵盤の底部(附図6—3)が確認される。さらに、新潟県阿賀野市大坪遺跡からも、胴部に花卉文を描いた白地鉄絵壺片が出土している(附図6—6)。



図15 白地鉄絵(黒花) 楼閣人物文枕 磁州窯系  
中国 元時代 42.0×16.6cm

京都では、平安京内から翡翠釉を施した白地鉄絵壺が出土している(附図6—4—2)。また、他地域ではほとんど類例のない稀な事例として、山水図を鉄絵具で描いた長方形枕が出土している(附図6—4—1、参考・類品 図15)。枕の上面および短側面の稜花形窓内には楼閣や橋上の人物が表され、窓周囲には花文が配される。前側面には竹葉文、後側面には花文が

描かれる。本作例は元代(十四世紀)の製品と考えられるが、室町期の池遺跡から出土している。廃棄に至った背景は出土状況からは特定できないものの、京都には他の消費地遺跡ではほとんど確認されない意匠性の高い磁州窯系陶器が舶来していたことになる。

京都以外では、鎌倉において磁州窯系陶器がまとまって出土している(附図6—8—12)。いずれも白地鉄絵によるものであるが、藤内定員邸跡などの作例では花卉文が描かれ、その筆致は花芯を点状に表し、そこから展開する花卉先端を細く引くなど、他地域の作例にはあまりみられない特徴を示す(附図6—8)。これらは十三世紀の金末—元前半に位置づけられる可能性があり、博多・福岡地域を除けば、比較的早期の作例が確認される数少ない事例といえる。もともと十四世紀代によくみられるタイプもある(附図6—12)。

(2) — 2—4、小結

十四世紀から十五世紀には白地鉄絵装飾が主流となり、とりわけ「酒会壺」形壺類の増加と広域的流通が顕著である。分布は博多を中心に九州・沖繩へ拡大し、さらに京都・鎌倉へも及ぶ。地域ごとに器形・文様・使用状況に差異が認められるほか、首里城の事例が示すように、伝世・再利用を伴う継続使用の可能性も指摘できる。

(3) 十六世紀以降の様相

当該期に舶来する磁州窯系陶器の数量はきわめて少ない。しかし、博多、あるいは西日本における大名の居館・城郭、港湾都市、さらに江戸の大名屋敷跡などから出土例が確認されている。

## (3) — 1、博多遺跡群

博多遺跡群では、十六世紀以降の包含層・遺構から磁州窯系陶器が出土する事例はごく限られている。博多遺跡群第42次調査地点では、第一面下から、白地鉄絵壺の花卉文を表した胴部片が出土している(附図7-1)。第一面は出土遺物の状況から江戸期の生活面、第二面は十六世紀後半に位置づけられているため、本破片も十六世紀以降に廃棄されたものと考えられる「註32」。ただし当該破片自体は、少なくとも十四世紀から十五世紀の製品と考えられることから、日本国内で伝世していた品が当該期に廃棄された可能性が高い。

また、器形は明確ではないものの、乳白色の下地をもち外面に花文を施した白地鉄絵壺片も出土している(附図7-2)。この破片は井戸跡(SK02)からの出土であり、共伴する景德鎮青花蓮子碗により十六世紀前半に位置づけられている。白地鉄絵壺片は十四世紀製の可能性があるため、十六世紀段階においても、一〇〇〜二〇〇年前に生産された器物が伝世した上で廃棄された可能性が想定される。さらに、器形不明の白地鉄絵片も確認されている(附図7-3)。

## (3) — 2、博多遺跡群以外

## (3) — 2-1、九州地域

博多遺跡群に近接し、かつて鴻臚館が所在した地点からは、緑釉搔落による瓶片が確認されている(附図7-4)。本破片の年代については再検討の余地があるが、ここでは一旦、報告書の見解に従い明代の製品として扱う。

大分市の大友氏関連遺跡からは、十六世紀において九州島内でもっとも多く磁州窯系陶器が出土している。いずれも白地鉄絵壺類である(附図7-5〜12)。蔭山万寿跡(第7次調査)出土の、龍文の鱗とみられる破片が示すように、十四世紀から広くみられる大型壺に加え、やや長胴の壺(附図7-11)も確認される。長胴壺については同形態に一括できない可能性もあるものの、肩が張り頸部が短い壺形は十六世紀に多い傾向があることから、大友氏が活動した時期に当該地へ搬入された可能性が高い「註33」。

このほか、博多遺跡群や大内氏関係遺跡とは別に、長崎でも出土が確認されている。一点は梅瓶で、胴部上半に窓枠状の区画を描き、その内側は破損しているため詳細は不明であるが、おそらく風景図を表していたものと思われる。底部は裾広がりとなり、明代十六世紀頃の作例と考えられる(附図7-13)。もう一点は獅子頭部片である(附図7-14)。なお、翡翠釉を施した梅瓶が出土した地点は、一五七一年に開始された町割り域に含まれ、年代上限は十六世紀末とされている「註34」。

## (3) — 2-2、九州・沖縄地方以外

沖縄地域についても、既に述べた通り、十六世紀以前に舶来した器物が十七世紀頃に廃棄された事例が想定されるが、本稿では重複を避け、詳細には立ち入らない。

山口市の大内氏館跡からは、十六世紀頃の作例とみられる燭台が出土している(附図7-15、16)。破片は二点であるが、同一個体と考えられ、復原器形は根津美術館所蔵の燭台に類似するとされている。なお、共伴遺物からは十八世紀まで下るとされている。

島根県広瀬町の富田城二ノ丸跡からは、胴部片が二十点ほど検出されており、その下限は当該城の廃城年である一六一一年と考えられている(附図7-17)。

岡山県岡山市の中島遺跡(戦国期の有力土豪・中島氏の居館跡)からは、十七世紀前半頃とみられる石組遺構および溝から、翡翠釉を施した白地鉄絵龍鳳文壺片がそれぞれ出土している。この壺は胴部の渦文などの特徴から十四世紀頃(下つても十五世紀)と考えられ、早期に舶来した器物が十七世紀前半まで伝世した事例として位置づけられる。同様に、十四世紀代の作例が十七世紀まで伝わった事例として、築城年が一六〇九年の兵庫県丹波篠山城から出土した白地龍文壺が挙げられる(附図8-2)。本品は直口気味で頸部が短く、胴部は球胴形を呈する。胴部に龍文を配し、龍文細部は鉄絵部分を練彫して表現する。なお本品は出光美術館所蔵の白地鉄絵龍文壺「図8」に類似する。

さらに兵庫津では、十六世紀末〜十七世紀前半頃の遺構面から、十二〜十三世紀頃とみられる白地搔落壺(あるいは水注)が出土している。胴部に花卉文、胴下部に蓮弁文を配する(附図8-1)。石川県宝達志水町(旧押水町)末森城跡からは、翡翠釉を施した白地鉄絵梅瓶が出土しており(附図8-3)、後述する江戸遺跡出土の十六世紀代梅瓶と同系統と考えられる。

また平安京(尚徳学校跡地)では、出土例は少ないものの、十六世紀頃に彭城窯などで焼造された作例とみられる白地鉄絵鉢が出土している。胴部に黒絵具で花卉文を描き、花芯部は練彫で表現する(附図8-4)。本品は、いわゆる「絵高麗碗」と称されるタイプに位置づけられる。

最後に江戸遺跡の事例を取り上げる。出土遺跡は、加賀前田藩江戸屋

敷跡(附図8-5、6)および寺院境内跡(附図8-7)である。いずれも基本的に白地鉄絵技法によるが、窓枠状の文様区画帯を設け、その内側に人物・風景を描いた作例(附図8-6)、鉄絵の上から練彫を加えた作例(附図8-5②、③)、いわゆる絵高麗の一類型として鉄塗りの上から長石釉を上掛けした碗(附図8-5①)、さらに鉄絵の上に翡翠釉を施した作例(附図8-7)などが確認される。江戸遺跡の出土例はいずれも十六世紀を中心に焼造された製品であり、同時に、磁州窯系陶器が十七世紀頃にアンティークとして用いられていた可能性を示す。

### (3) 3、小結

十五世紀以降、貿易陶磁器の流通量は関西、十八〜十九世紀になると江戸(東京)での出土量が多いことが知られる。また琉球は中国との進貢貿易が進展する。大陸との交易のあり方が変化し、博多の貿易陶磁器の出土量や状況も変化を迎えていく「註35」。この変化に連動するかのようには、博多における磁州窯系陶器の出土例が激減する点は重要である。他方、博多以外では列島各地で散見され、その出土地は大内氏・大友氏関連の都市遺跡、中世後半期の有力武家の居館・城館、交易・流通拠点や港湾都市などに集中する傾向が認められる。

器種は圧倒的に壺・瓶類が中心である。ただし製作年代は十六世紀に限らず、十二〜十三世紀や十四世紀に位置づけられる壺類も含まれる。したがって、かつて日本に舶来した器物が十六世紀、さらには江戸期に至るまで伝世していた可能性が示唆される。

## 三、日本列島における磁州窯系陶器の受容の様相

本節では、前節で整理した出土状況を踏まえ、日本列島における磁州窯系陶器の受容の様相を簡潔にまとめる。

## (1) 分布

分布傾向は「西高東低」〔註36〕と表現されるように、博多をはじめ九州・沖縄、さらに京都に至る西日本で比較的多く確認される。一方、東日本では出土地点・点数ともに減少するものの、平泉、鎌倉、江戸など、各時代の拠点となる都市遺跡から出土例が知られている。

地域差はあるが、いずれの地域においても、交易・交通の拠点、あるいは大名・武家・寺院関連の遺跡といった性格をもつ地点から出土する点は共通している。

## (2) 器種・組成と地域性

出土器種と組成について、時代・地域を通じて共通する特徴は、壺・瓶類が中心である点である。十二〜十三世紀には、とくに搔落技法による瓶類が多く、十四世紀以降は白地鉄絵の壺・瓶(翡翠釉を施した作例を含む)が増加する。こうした傾向は、福建産白磁・青磁や龍泉窯青磁が碗・鉢・皿類を中心に流通する状況とは異なり、磁州窯系陶器の舶来器種が一定程度偏っていることを示している。

他方、博多と京都では、壺・瓶類以外の器種も比較的よく確認される。とくに十一世紀末〜十二世紀頃、博多が大陸交易の窓口として機能した時期には、碗・鉢類、喫茶用の天目、碗(盞)を載せる盞托、さらに動

物をかたどった小型俑(玩具)などが出土している。先述したようにこれらは、博多遺跡群の中でも日宋貿易を担った唐人(あるいは唐人系の商人集団)の居住区からの出土が知られており〔註37〕、生活様式を背景とする組成であった可能性がある。

また京都では、十二世紀に白地黒搔落製品がみられるほか、実用器としての印花象嵌・鉄絵の陶枕が出土する。その後も、山水人物図を描いた白地鉄絵枕、出土例が限られる絵高麗手の碗・鉢類などが確認されている。総じて精緻で意匠性の高い作例が多い点は、京都が長期にわたり政治・文化の中心であり、手工業が集積した都市であったことと関係する可能性がある〔註38〕。

さらに十四世紀の鎌倉、十六世紀以降において、都市圏や江戸の遺跡群に出土が偏る傾向がみられる点は、他の中国陶磁と同様、政治の中心として大名屋敷が集積した地域であったことに起因すると考えられる。

ところで、鎌倉の建長寺には注目すべき出土資料が存在する。それは同寺の得月庵地点から出土した黒漆塗の漆器碗である〔図16〕。本作品は、腰部がやや屈曲し、腰から口縁にかけて広口状を呈する器形である。とくに注目されるのは、内面に筆先を用いた点彩によって表現されたと思われる油滴状の文様である。

この文様は、華北地方において金代(一一一五―一二三四年)に焼造された黒釉天目にみられる油滴文様と近似する〔図17〕。これまで鎌倉をはじめ日本列島各地では、建盞や茶洋窯の器高の低い天目、吉州窯天目など、いわゆる南方系天目の存在が確認されてきた一方で、北方系天目の出土例は確認されていない。しかしながら、少なくとも江戸時代には、尾張徳川家〔図17〕や仙台伊達家が北方系の油滴天目を所持していたこ



図 16-2 建長寺境内出土の漆器碗（外面） 建長寺



図 16-1 建長寺境内出土の漆器碗（内面） 建長寺

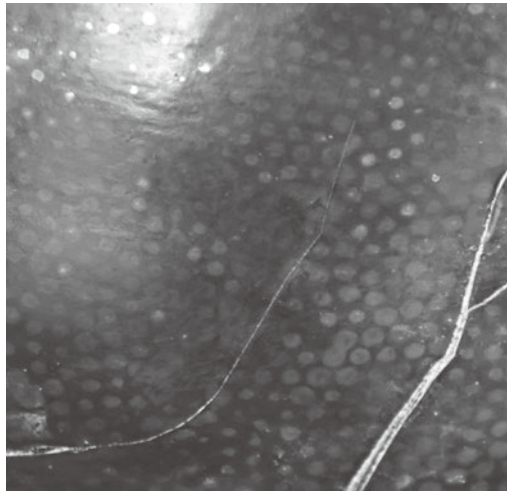


図 16-3 建長寺境内出土の漆器碗（見込み・部分）  
建長寺



図 17-2 油滴天目（曜変天目）（見込み） 磁州窯系  
中国 金時代 径 13.3cm 徳川美術館 大名物



図 17-1 油滴天目（曜変天目）（正面） 磁州窯系 中国  
金時代 径 13.3cm 徳川美術館 大名物

とが知られている。

これらの茶碗がいつ日本にもたらされたのかは明確ではないものの、建長寺出土漆器碗にみられる油滴状文様は、華北産油滴天目の文様を参照せずに描写することは困難と考えられるほどの高い類似性を示している。加えて、鎌倉では十二〜十三世紀頃および十三世紀後半〜十四世紀頃の磁州窯系陶器が出土している点も踏まえると、北方系天目が同時期に日本へ舶来していた可能性を指摘することができる。もともとこの漆器は十五世紀頃の国産の可能性もあるが、その場合でも、十五世紀には華北産の油滴天目が日本には存在していたと考えられることから、いずれにせよ極めて重要な漆器碗ということになる。本漆器碗の位置づけについては、今後さらに検討を重ねる必要がある。

### (3) 白地鉄絵壺・瓶が重宝された背景

十四世紀以降、白地鉄絵壺・瓶（翡翠釉を施した作例を含む）が一定数確認される。大型品から小型品まであるが、中世において大量に舶来した龍泉窯青磁や福建産陶磁に比べれば、その数量は限られる。この背景には、当時の対日交易の主要窓口が南方の寧波にあった点が関係すると考えられる。

一方、中国国内に目を向けると、南宋〜元代の杭州をはじめとする南方都市でも華北産磁州窯系陶器の出土が知られ、南方地域でも一定の流通があったことが確認できる〔註39〕。したがって、日本に舶来した磁州窯系陶器の一部は、こうした南方都市で流通・使用されたのち、交易品として日本にもたらされた可能性がある。

これらの壺・瓶にどのような交易品が入っていたかは不明である。た

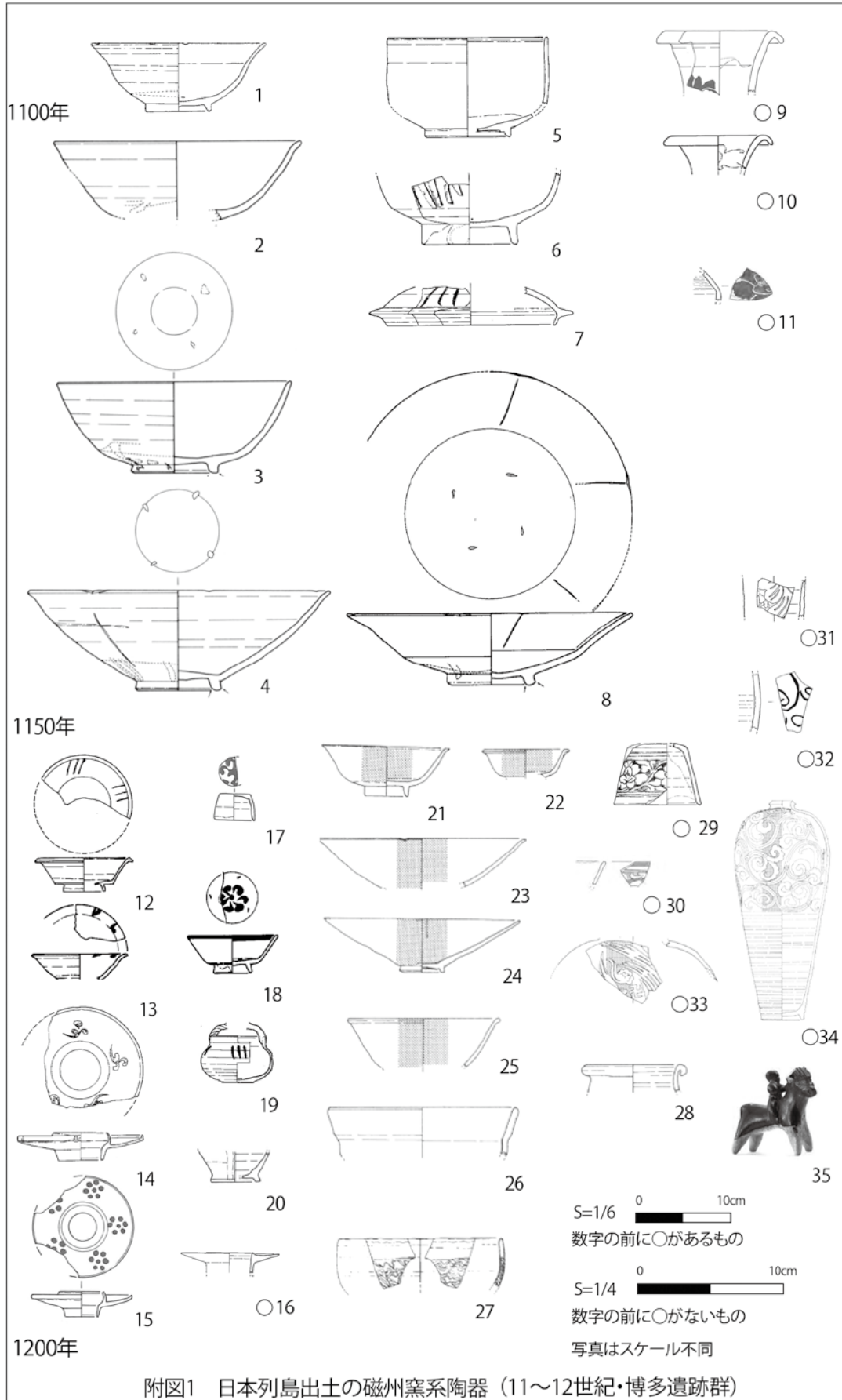
だし、舶来後に埋納容器として用いられた事例や、長期にわたり使用されたのちに廃棄された伝世品が確認されることから、壺・瓶としての実用性に加え、「中国からもたらされた器」として価値づけられ、相対的に重視された可能性が高い。

とくに磁州窯系陶器が流通しはじめた十二世紀、日本にもたらされた中国陶磁の中心は福建産白磁と龍泉窯青磁であり、十五世紀後半頃まで単色釉が主流であった。これに対し、磁州窯系陶器は筆描きにより流麗な文様を表す点で、白磁・青磁とは異なる趣を有する。加えて、舶来数量が南方産陶磁に比して少ないことも、希少性を通じた価値づけに作用したと考えられる。さらに、壺・瓶類が中心であったことは、内容物を伴う特別な容器として取り扱われた背景とも関連する可能性がある。

### まとめにかえて

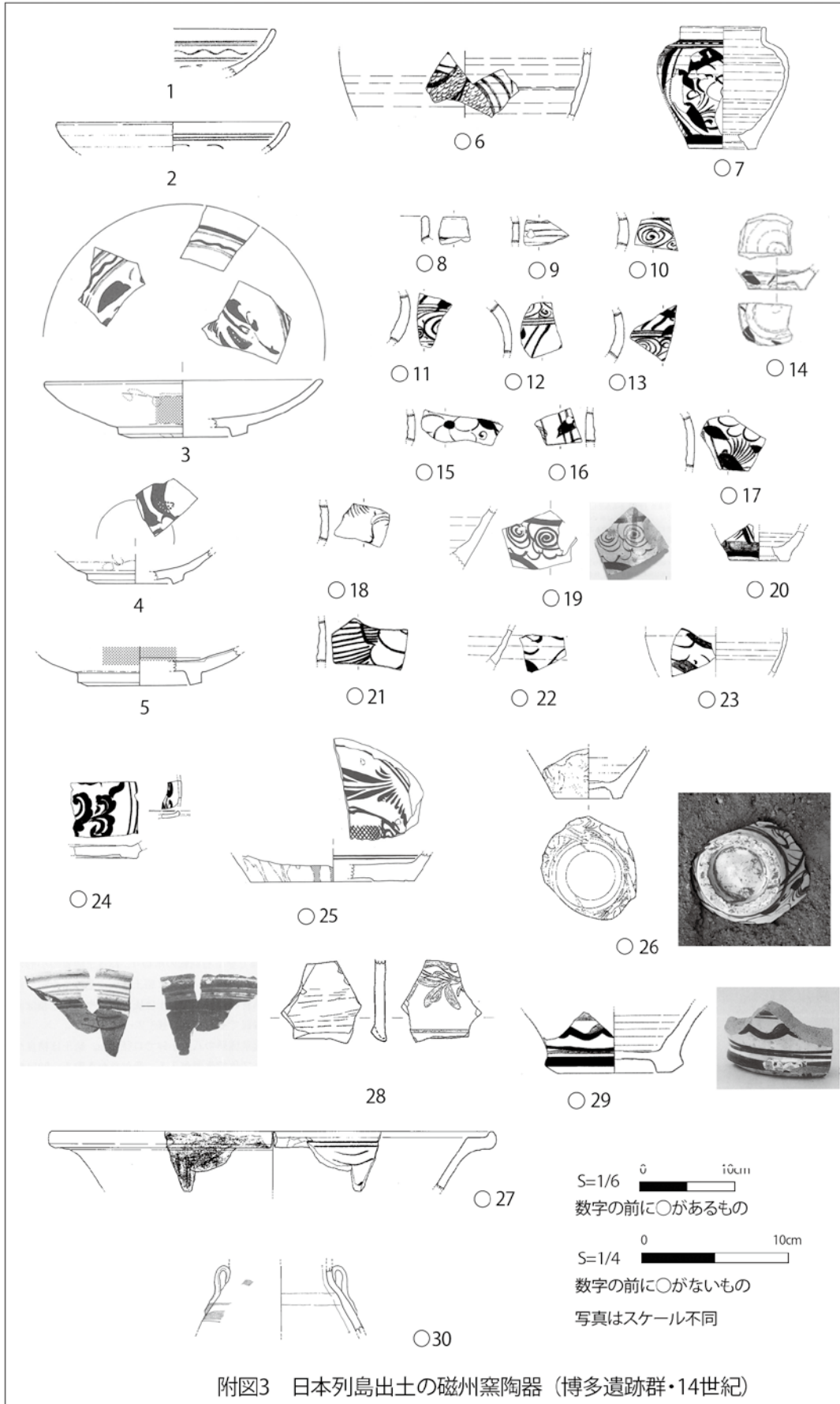
本論では、日本列島に出土する磁州窯系陶器について、その分布、器種構成、年代的推移を中心に概観してきた。ただし、冒頭で述べたように、実見できていない資料も多く、また磁州窯系陶器の技法や文様の影響を受けた南方産陶器については、十分に検討することができなかった。

今後は、磁州窯系陶器に限定するのではなく、北方系陶器全般を視野に入れた資料集を進め、その中で磁州窯系陶器が日本列島においていかなる文脈で受容されたのかを、より精緻に検討する必要がある。さらに、杭州や寧波をはじめとする中国南方地域における磁州窯系陶器の受容状況、ならびに朝鮮半島出土資料との器種構成や産地の比較を行うことで、流通経路や受容・消費の実態についても、より立体的な考察が可能になると考えられる。これらの点は、今後の課題としたい。

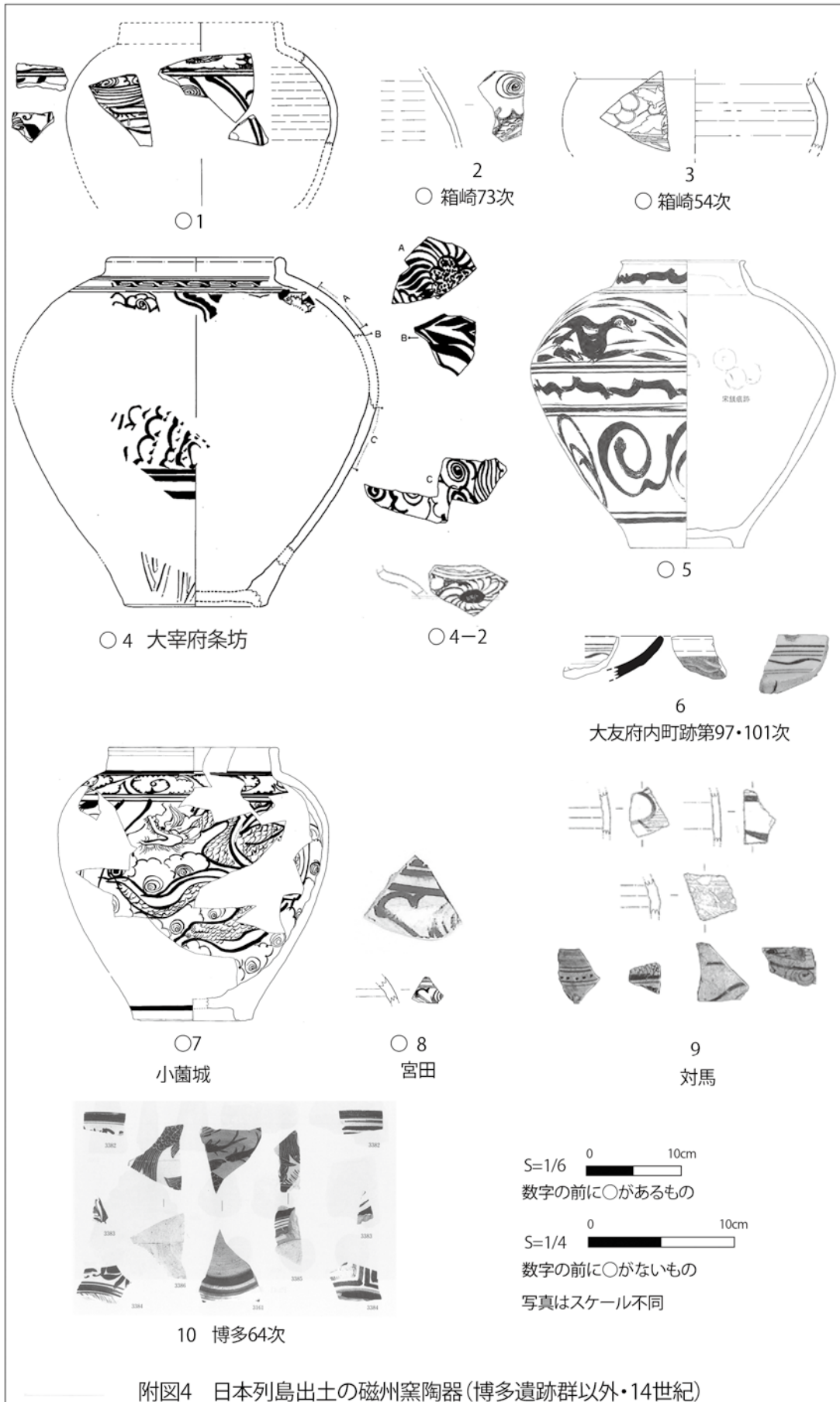




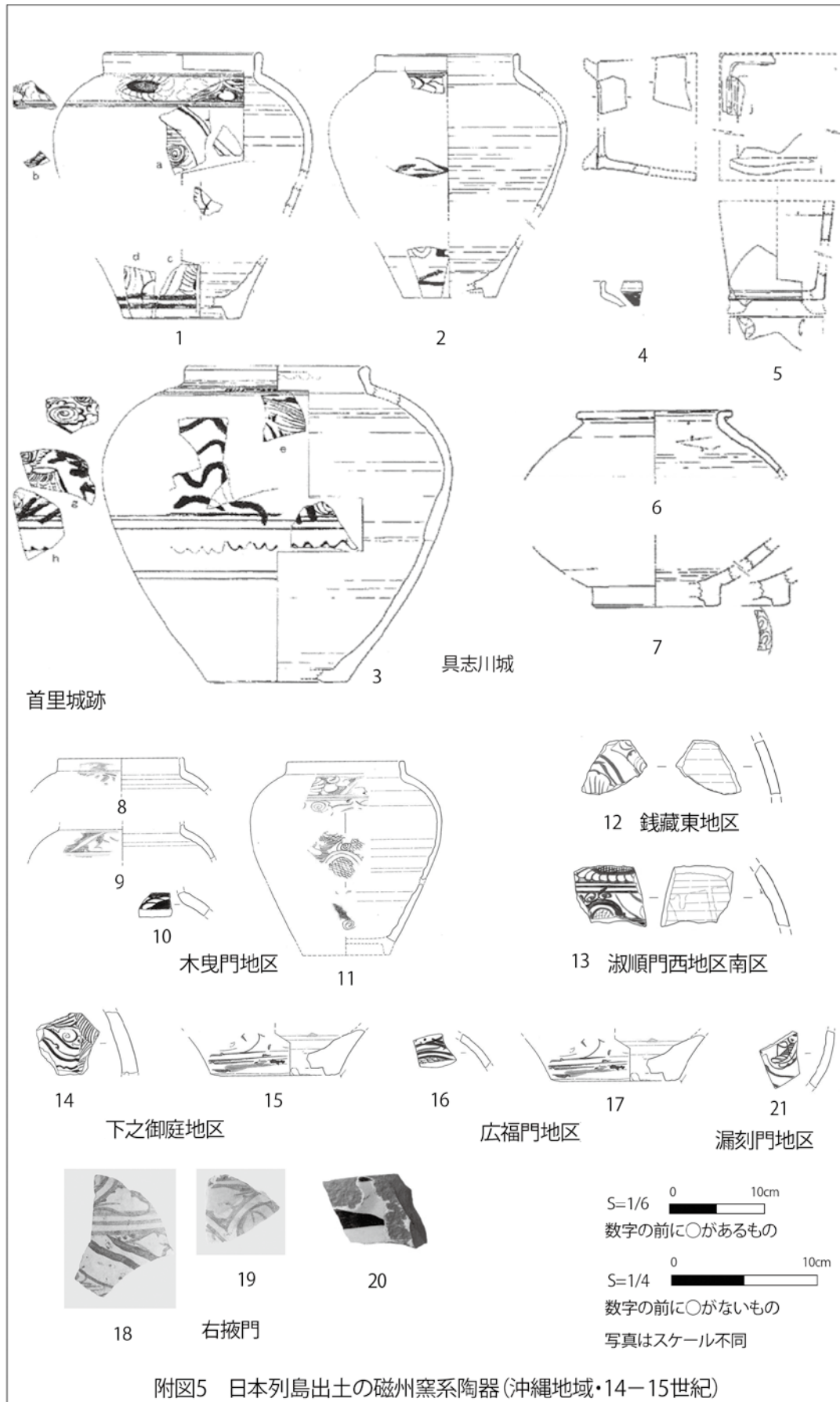
附図2 日本列島出土の磁州窯系陶器 (12-13世紀・博多遺跡群以外)



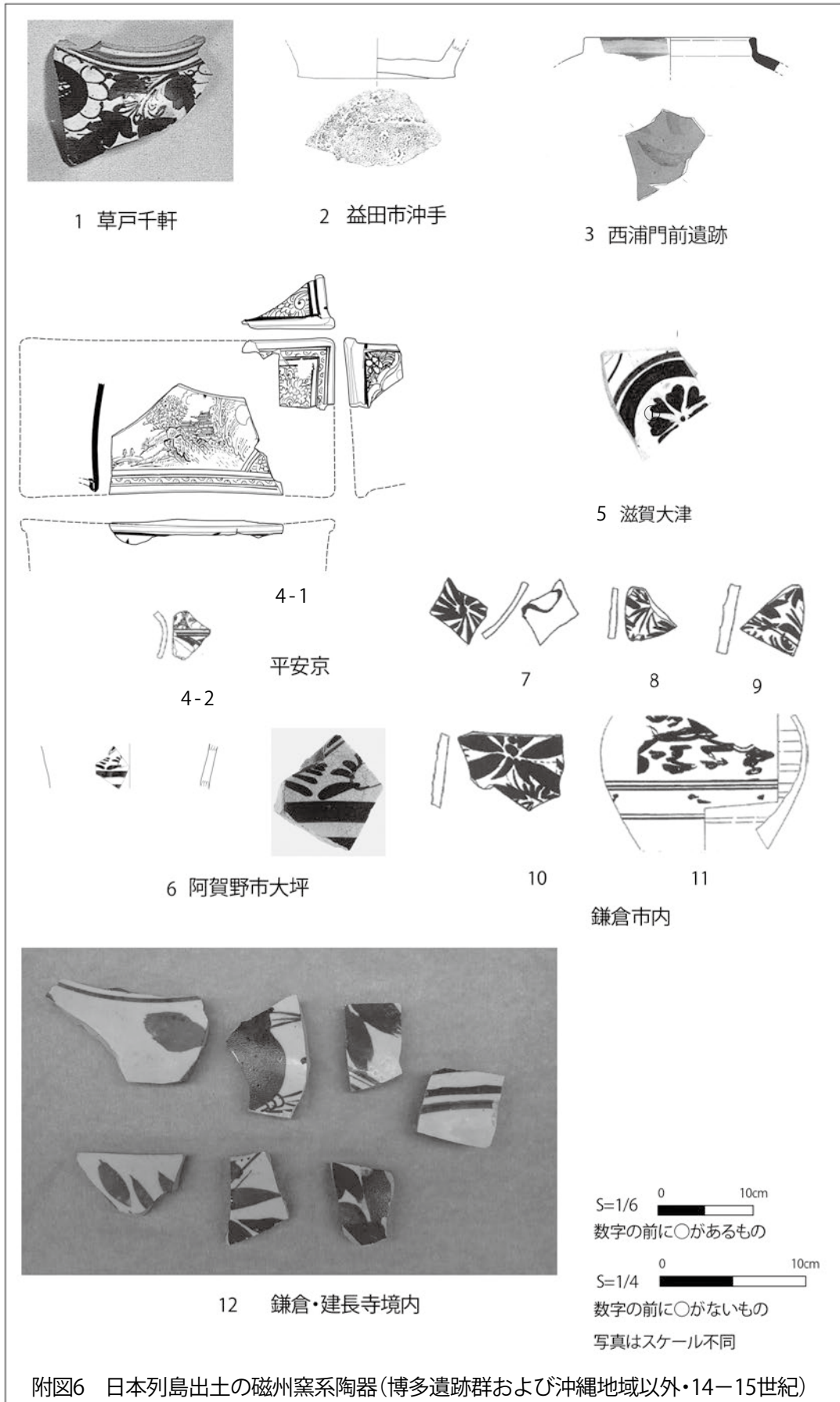
附図3 日本列島出土の磁州窯陶器（博多遺跡群・14世紀）



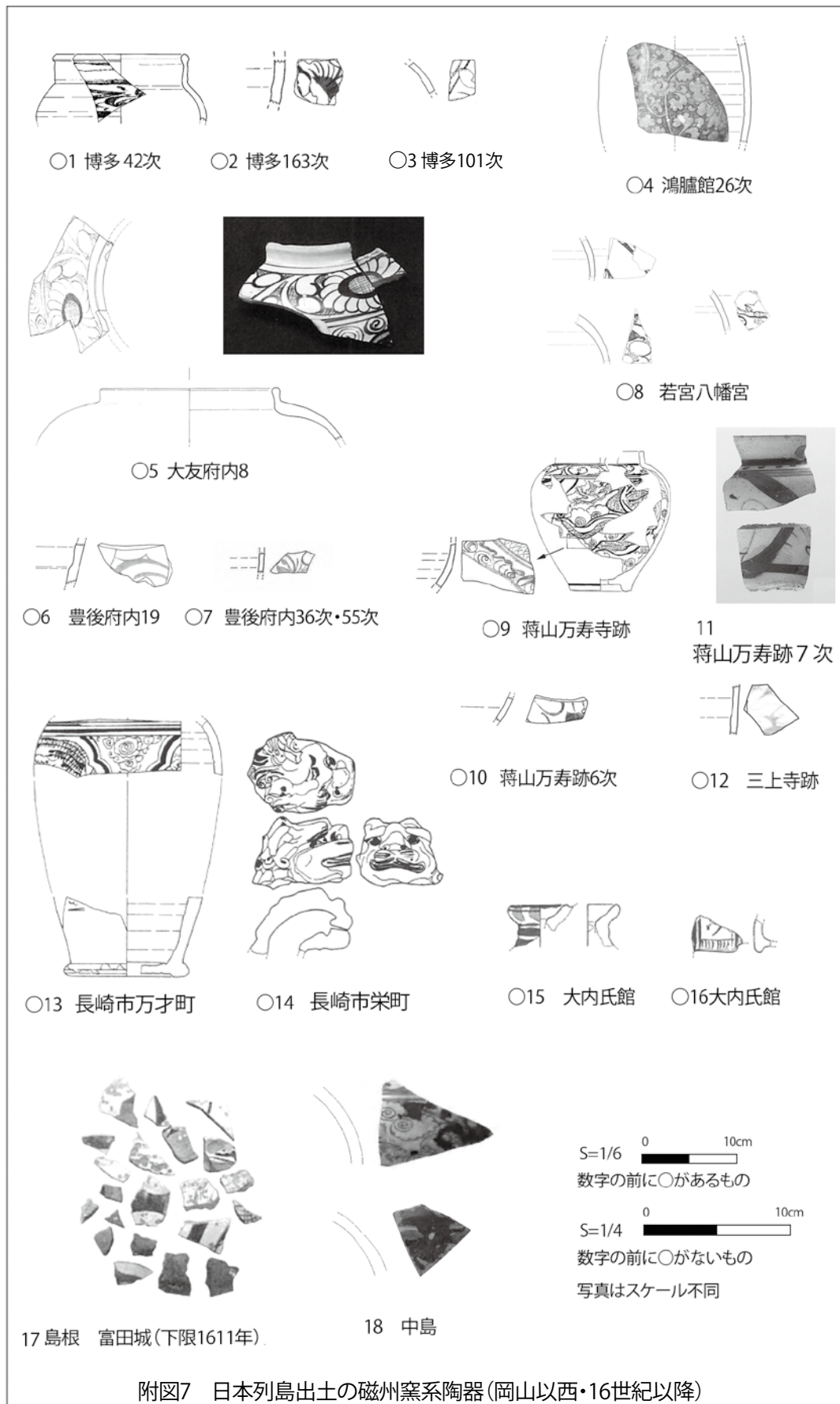
附図4 日本列島出土の磁州窯陶器(博多遺跡群以外・14世紀)



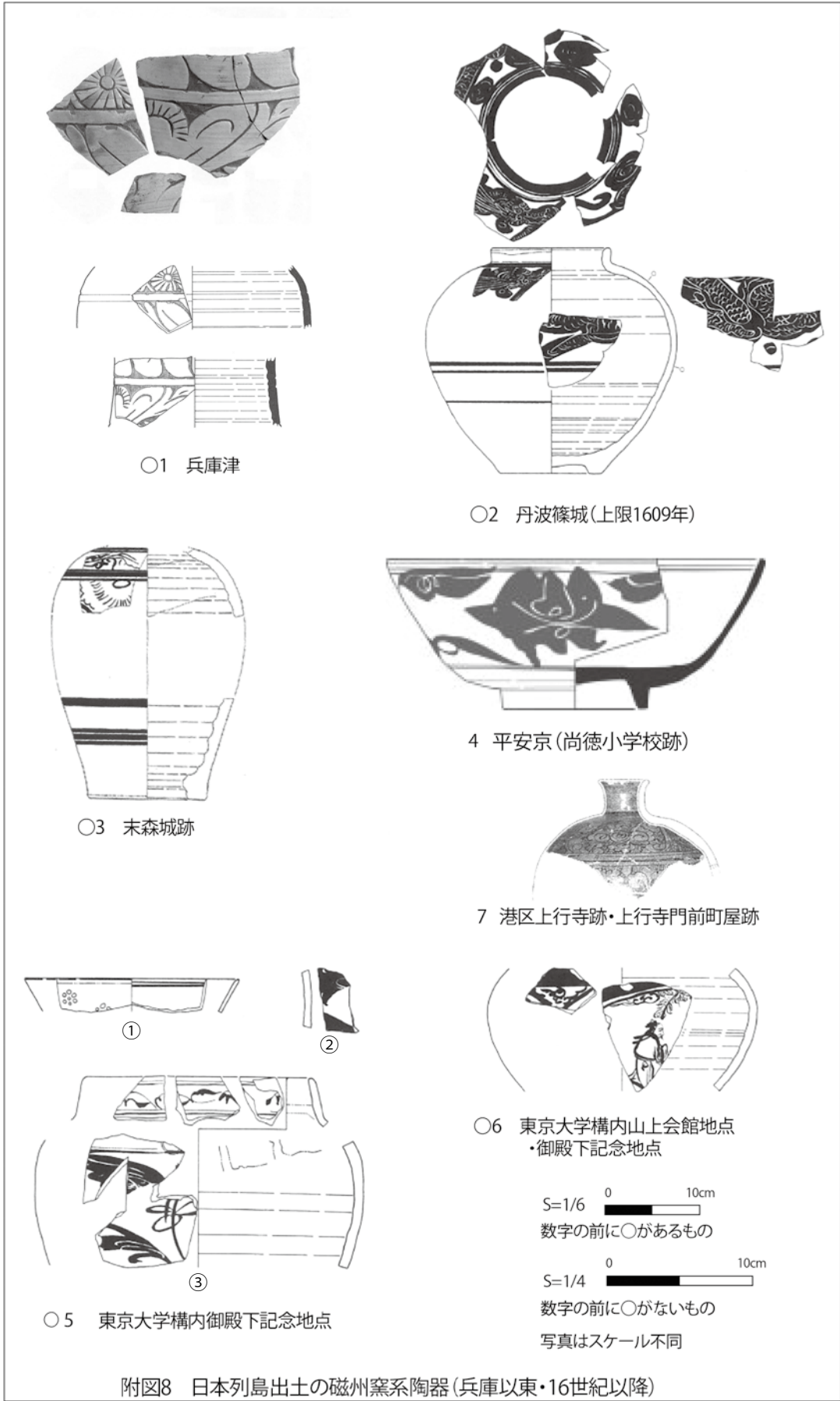
附図5 日本列島出土の磁州窯系陶器(沖縄地域・14-15世紀)



附図6 日本列島出土の磁州窯系陶器(博多遺跡群および沖縄地域以外・14-15世紀)



附図7 日本列島出土の磁州窯系陶器(岡山以西・16世紀以降)



附図 図版出典一覧

附図	番号	遺跡・調査名	出典	
附図 1	1、5 - 7、12、14、20、21	博多 6 次	森本 1998、図 2 より転載。福岡市教育委員会 1986『博多 第 6 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 126	
	2 - 4、8、10、13、18	博多 79 次	福岡市教育委員会 1996『博多 50 博多遺跡群第 79 次調査の概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 447 集	
	9	博多 14 次	福岡市教育委員会 2023『博多 190 博多遺跡群第 221 次調査報告(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1467	
	11、16、27	博多 172 次	福岡市教育委員会 2010『博多 135 博多遺跡群第 172 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1086 集	
	15、33、34	博多 (地下鉄 A)	森本 1998、図 2 より転載	
	17	博多遺跡群 (築港線 K)	森本 1998、図 2 より転載	
	19	博多 125 次	福岡市教育委員会 2003『博多 88 博多遺跡群第 125 次発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書 759、福岡市教育委員会	
	22、24	博多 71 次	森本 1998、図 2 より転載。福岡市教育委員会 1996『博多 53 博多遺跡群第 71 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 450	
	23	博多築港線 II	森本 1998、図 2 より転載	
	25	博多築港線 V	森本 1998、図 2 より転載	
	26	博多 40 次	森本 1998、図 3 より転載。福岡市教育委員会 1990『博多 15 博多遺跡群第 40 次調査の概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書 230	
	28	博多 62 次	森本 1998、図 3 より転載。福岡市教育委員会 1995『博多 48 博多遺跡群第 62 次発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 397	
	29	博多 203 次	福岡市教育委員会 2021『博多 170 博多遺跡群第 203 次調査報告』(第 2 分冊)福岡市埋蔵文化財調査報告書 1405	
	30、32	博多 199 次	福岡市教育委員会 2016『博多 154 博多遺跡群第 199 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1289	
	31	博多 85 次	福岡市教育委員会 1997『博多 57 博多遺跡群第 85 次調査の概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書 522	
	34	博多 221 次	福岡市教育委員会 2023『博多 190 博多遺跡群第 221 次調査報告(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1467	
	35	博多 35 次	福岡市教育委員会 1988『博多 12 - 博多遺跡群第 35 次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 177	
	附図 2	1	福岡吉塚 3 次	福岡市教育委員会 1998『吉塚 3 吉塚遺跡群第 3 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 553
		2	福岡箱崎 52 次	福岡市教育委員会 2008『箱崎 33 箱崎遺跡第 52 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 997
3		柳川西蒲池池淵遺跡 II 地点	福岡県教育委員会 2014『西蒲池池淵遺跡 福岡県柳川市大字西蒲池所在遺跡の調査 / 国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 4 - 2 巻』	
4		南さつま持躰松	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『持躰松遺跡 中小河川改修事業 (万之瀬川) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 120	

附图	番号	遺跡・調査名	出典
	5	南さつま渡畑	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011『渡畑遺跡 中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9巻2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 159
	6	南さつま芝原	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『芝原遺跡 中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10 第3巻』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 170
	7	平安京遺跡群	京都市埋蔵文化財研究所 2022『平安京左京四条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022 - 3。元興寺文化財研究所 2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』公益財団法人元興寺文化財研究所。京都市埋蔵文化財研究所 2001『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 19 冊。鈴木 2022(図 2 より転載)
	8	舞鶴満願寺跡	京都府埋蔵文化財調査研究センター 2021『1 満願寺跡第 2 次』『京都府遺跡調査報告集』181
	9	大津市内	鈴木 2022(図 2 より転載)
	10	吉田川西	日本道路公団名護家建設局、長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター 1989『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書 3 塩尻市内その 2』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3
	11	平泉 45 次	平泉町教育委員会、東北電力株式会社 1994『柳之御所跡第 45 次発掘調査報告書—平泉変電所昇圧工事に伴う調査—』岩手県平泉町文化財調査報告書第 46
附图 3	1、2	博多 124 次	福岡市教育委員会 2004『博多 87 博多遺跡群第 124 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 758
	3、25	博多 62 次	森本 1998(図 4 より転載)。福岡市教育委員会 1995『博多 48 博多遺跡群第 62 次発掘調査概報—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 397
	4、19	博多 78 次	森本 1998(図 4 より転載)。福岡市教育委員会 1995『博多 44 博多遺跡群第 78 次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書 393
	5	博多 71 次	森本 1998(図 4 より転載)。福岡市教育委員会 1996『博多 53 博多遺跡群第 71 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 450
	6	博多 42 次	森本 1998(図 3 より転載)。福岡市教育委員会 1991『博多 17—博多遺跡群第 42 次発掘調査概報—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 245
	7、20、22—24	博多 29 次	森本 1998(図 3、4 より転載)。福岡市教育委員会 1987『博多Ⅷ 博多遺跡群第 29 次調査の概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 148
	8—13、15—18、21、27	博多 64 次	福岡市教育委員会 1995『博多 47 博多遺跡群第 64 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 396
	14	博多 35 次	福岡市教育委員会 1988『博多 12—博多遺跡群第 35 次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 177
	26	博多 237 次	福岡市教育委員会 2021『博多 180 博多遺跡群第 237 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1423
	28	博多 4 次	福岡市教育委員会 2023『博多 192 博多遺跡群第 213 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1480

附図	番号	遺跡・調査名	出典
	29	博多 122 次	福岡市教育委員会 2002『博多 84 博多遺跡群第 122 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 710
	30	博多 199 次	福岡市教育委員会 2016『博多 154 博多遺跡群第 199 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1289
附図 4	1	福岡箱崎 8 次	福岡市教育委員会 1999『箱崎 7 箱崎遺跡第 8 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 591
	2	福岡箱崎 73 次	福岡市教育委員会 2017『箱崎 49 箱崎遺跡第 73 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1316
	3	福岡箱崎 54 次	福岡市教育委員会 2008『箱崎 34 箱崎遺跡群第 54 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 998
	4 - 1、2	大宰府条坊、太宰府天満宮 4 次	太宰府教育委員会『太宰府天満宮Ⅲ 第 3・4 次調査』太宰府市の文化財第 26
	5	祇園	水野 郎編 2000『祇園遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査』熊本県文化財調査報告 188
	6	大友府内 97・101 次	大分市教育委員会 2016『大友府内 22 (2) (4) 中世大友府内町跡第 97・101 次調査 / 病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 141
	7	小園城	長崎県教育委員会 1991『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 8』長崎県文化財調査報告書 99
	8	宮田	長崎県教育委員会 1989『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 6』長崎県文化財調査報告書 93
	9	対馬	鈴木 2022 (図 3 より転載)
	10	博多 64 次	福岡市教育委員会 1995『博多 47 博多遺跡群第 64 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 396
附図 5	1 - 7	久米島町具志川城跡	沖縄県久米島町教育委員会 2005『具志川城跡発掘調査報告書Ⅰ - 史跡具志川城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告』久米島町文化財調査報告書第 2 集。沖縄県久米島町教育委員会 2008『具志川城跡発掘調査報告書Ⅱ - 史跡具志川城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告』久米島町文化財調査報告書第 4 集。鈴木 2022 (図 4 より転載)
	8 - 11、14 - 17、21	首里城跡 (木曳門地区)	沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡 下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 3
	12	首里城跡 (銭蔵東地区)	沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『首里城跡 銭蔵東地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 80
	13	首里城跡 (淑順門西地区南区)	沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡 淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 68
	18 - 20	首里城跡 (右掖門地区)	沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『首里城跡 右掖門及び周辺地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 14
附図 6	1	草戸千軒	東京国立博物館 1978『日本出土の中国陶磁』
	2	益田沖手	益田市教育委員会 2010『沖手遺跡 市道中吉田久城線道路改良工事に伴う文化財発掘調査』

附図	番号	遺跡・調査名	出典
	3	西浦門前	島本町教育委員会 2021『島本町文化財調査報告書 西浦門前遺跡』発掘調査概要報告 41
	4-1	平安京	京都市埋蔵文化財研究所 2017『平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-10
	4-2、5、7-11	平安京、大津、鎌倉	鈴木 2022 (図 2、4 より転載)
	6	阿賀野市大坪	新潟県教育委員会 2006『大坪遺跡 一般国道 49 号安田バイパス関係発掘調査報告書 1』新潟県埋蔵文化財調査報告 153
	12	建長寺蔵	筆者撮影
附図 7	1	博多 42 次	福岡市教育委員会 1991『博多 17 - 博多遺跡群第 42 次発掘調査概報-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 245
	2	博多 163 次	福岡市教育委員会 2008『博多 121 博多遺跡群第 163 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 991
	3	博多 101 次	福岡市教育委員会 1998『博多 65 博多遺跡群第 99 次・第 101 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書 560
	4	福岡鴻臚館 26 次	福岡市教育委員会 2024『史跡 鴻臚館跡 26 中世編』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1524
	5	大友府内 8	大分市教育委員会 2006『大友府内 8 都市計画道路六坊新中島線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 65
	6	豊後府内 19	大分県教育庁埋蔵文化財センター 2015『豊後府内 19 中世大友府内町跡第 96 次・99 次調査区 中世大友府内町跡第 96 次・第 99 次調査区 / 大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告 83
	7	豊後府内 36 次・55 次	大分県教育委員会 2008『豊後府内 9 中世大友府内町跡・第 36 次・第 55 次調査区 / 庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 24
	8	若宮八幡宮	大分市教育委員会文化財課 2006『若宮八幡宮遺跡 第 1 次発掘調査 / 上野ヶ丘中学校の校舎建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 67
	9	豊後府内 6	大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007『豊後府内 6 中世大友府内町跡第 10 次調査区 / 大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 15
	10	蔭山万寿寺跡 (6 次)	大分県立埋蔵文化財センター 2019『蔭山万寿寺跡 旧万寿寺跡第 6-10 次調査 都市計画道路庄の原佐野線 (元町工区) 建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 第 3 分冊 (写真図版編)』大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 6
	11	蔭山万寿寺跡 (7 次)	大分県立埋蔵文化財センター 2019『蔭山万寿寺跡 旧万寿寺跡第 6-10 次調査 都市計画道路庄の原佐野線 (元町工区) 建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 第 2 分冊』大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 6
	12	佐伯市三上寺跡	佐伯市教育委員会 2014『柵牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書 2』佐伯市文化財調査報告書 4

附図	番号	遺跡・調査名	出典
	13 - 17	長崎市万才町 長崎市栄町 大内氏館 島根富田城	鈴木 2022 (図 4、5 より転載)
	18	中島	岡山県教育委員会 2009 『中島遺跡・宮南遺跡・国長遺跡・天神河原遺跡 都市計画道路竹田升田線街路改築に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 221
附図 8	1	兵庫津	神戸市教育委員会 2010 『兵庫津遺跡発掘調査報告書 2 第 14・20・21 次調査』
	2	丹波城跡	鈴木 2022 (図 4 より転載)
	3	押水末森城跡	宝達志水町教育委員会 2007 『末森城等城館跡群』
	4	京都市尚徳小学校跡	京都市埋蔵文化財研究所 2005 『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8
	5、6	東京大学構内山上会館地点・御殿下記念地点	東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第 1 分冊 山上会館地点の調査』東京大学埋蔵文化財調査室発掘報告書 4。堀内英機、藤掛泰尚 2021 『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集 (2)』近世貿易陶磁器調査・研究グループ
	7	港区上行寺跡・上行寺門前町屋跡	株式会社長谷工コーポレーション、港区教育委員会、株式会社盤古堂 2006 『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』港区近世江戸関連遺跡発掘調査報告 45

〔註〕

- 註1—秦等二〇二一、三頁。  
 註2—秦等二〇二一、三頁。新井二〇一八、一四二頁。  
 註3—劉二〇〇三、五六頁。秦等二〇二一、三頁。  
 註4—北京大學考古學系等一九九七、五一二頁。  
 註5—馬二〇〇二、一五九頁。  
 註6—秦等二〇二一、四頁。  
 註7—さらに劉濤氏は、白化粧を行い、白釉、黒釉、醬釉、黄釉、孔雀藍釉および各種の低火度単色釉と三彩などがみられるとしている(劉二〇〇三、五六頁)。  
 註8—なお清代に入っても陶磁器生産は継続され、黒と白を基調とした伝統的な意匠も継承されているが、清代後期は粗製の青花磁、そして民国時代には五彩磁器なども生産された(葉二〇〇九(上)、二〇二頁)。  
 註9—森達也氏は磁州・觀台鎮の製品に近い製品を焼造する生産地をA類、類似するものの独自性を有している地域をB類として分けている。そしてA類はとくに河北南端部、河南、山西南端部、B類は陝西、山東、安徽、山西中部・北部、そしてB類はさらに、B類として西夏陶磁(寧夏)、遼陶磁(内蒙古、遼寧、北京)と分けている。なおB類ではとくに山西北部の大同窯、渾源窯、懷仁窯や寧夏靈武窯などで、A類であまり見られない特徴の黒釉搔落技法が多用されていることが特徴となっていることも指摘している(森二〇二二、三二頁)。  
 註10—森二〇二二、三〇頁。  
 註11—馮一九六四、四五頁。  
 註12—長谷部一九七四、九三頁。  
 註13—馬二〇〇二。なおここでは白地搔落黒象嵌、白地搔落白象嵌、白地裝飾、白地紅緑彩、外黒釉内白無地、黒釉白斑、黒釉鏤花・鉄斑、黒釉彫像、黒釉油滴、黒釉禾目、黒釉玳瑁、鉛釉・褐釉・茶褐釉、緑釉白地黒搔落、緑釉白地鉄絵、緑釉白地鉄絵線彫、緑釉貼花、緑釉飛白文、三彩印花・線彫、三彩彫像、黄釉、黄釉印花、王釉彫像、仿定窯白地陶器、仿黒定、仿緑定、仿鈞窯澱青釉陶器、青磁、黄褐釉などの説明がなされている。仿定窯白地陶器や仿黒定、黄褐釉などは必要に応じこの後とりあげるが、他に關しては日本での出土例はほとんどないと思われるので、ここでは割愛した。  
 註14—森二〇二二、三三頁。  
 註15—長谷部一九七四、二三頁。
- 註16—森二〇二二、三三頁。  
 註17—北京大學考古學系等一九九七。  
 註18—劉二〇〇三、五七頁。  
 註19—文字裝飾には吉祥語、格言、詩、曲、商品名や点名の宣伝などがある。馬氏の分類では文字裝飾は独立した裝飾技法としている(馬二〇〇二、一六二頁)。  
 註20—森二〇二二、三三頁。  
 註21—劉二〇〇三、六一頁。  
 註22—鈴木裕子氏(二〇二二)は、第一段階に關しては一一〇〇年頃から一二〇〇年頃と枠組みを設定している。博多遺跡群以外では十三世紀と考えられる出土例もあることから、本論では第一段階は一一〇〇年から一三〇〇年頃として整理しておく。  
 註23—森本一九九八、四五六頁。  
 註24—柿添二〇一五、一六〇頁。  
 註25—福岡市教育委員会二〇二三(博多一九〇)、二〇六頁。  
 註26—馮・李二〇〇五(上)、一六三頁。馮二〇一三、一八一頁等。  
 註27—八重樫二〇二三、二五頁。  
 註28—田上二〇二〇、六八一頁。  
 註29—博多遺跡群29次の第3層は、その時期の下限は十六世紀末から十七世紀の可能性があるとされている。ただし器物としては十四世紀から十六世紀のものが多く、このことから当該包含層から出土している附図3-7、20、24の十四世紀の磁州窯陶器は、十四世紀から十五世紀に博多遺跡群において使用され、廃棄されたものとして考えて本時期のものとして扱うことにした。  
 註30—水野郎編二〇〇〇、一六頁。  
 註31—沖繩県立埋蔵文化財センター二〇〇五、第42図6-9。  
 註32—福岡市教育委員会『博多17 福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集』(福岡市教育委員会、一九九一年)、一一頁、一三頁。  
 註33—郭二〇〇五、二五頁、六六頁。泰州明嘉靖三十七年(一五八八)劉湘夫婦墓出土の陶器は、河南禹州窯の製品と考えられている。  
 註34—鈴木二〇二二、八二頁。  
 註35—堀内・鈴木二〇一三、一五五頁。  
 註36—鈴木二〇二二、八三頁。  
 註37—田上二〇二〇、六八一頁。  
 註38—大阪市立美術館二〇二二、一九四頁。

註39—杭州市文物考古所二〇一三、(下)二八五頁。森二〇一三b、一一〇頁。

【参考文献】(五〇音順)

日本語

- ・新井崇之『中国官窯史の研究—官窯の管理・運営体制を中心に』(明治大学大学院文学研究科二〇一七年度博士学位請求論文、二〇一八年)
- ・岩元康成「南九州から奄美諸島の貿易陶磁の研究」『貿易陶磁研究』四〇、二〇一九年、七八—九三頁。
- ・大阪市立美術館『白と黒の競演—中国・磁州窯系陶器の世界』(大阪市立美術館、二〇〇二年)。
- ・大庭康時「基準資料としての貿易陶磁器 12世紀 博多遺跡群第79次調査1827号遺構 広東系・磁州窯系白磁」『季刊考古学』七五、二〇〇一年、五一—四三頁。
- ・柿添康平「磁州窯系生産地の地域性について 一〇—一四世紀を中心に」『中国考古学』一五、二〇一五年、一五三—一七七頁。
- ・小山富士夫「磁州窯に就いて」『美術研究』一三四、一九四四年、一八一—三五頁。
- ・金沢陽「中国唐明清時代の陶磁生産と海外輸出」『陶磁器流通の考古学』(高志書院、二〇一三年)、一一九—一五四頁。
- ・秦大樹(訳 小野木裕子)「磁州窯様式の形成と発展」『東洋陶磁』二〇、一九九〇年、一一一—一三三頁。
- ・鈴木裕子「絵高麗—生産年代へのアプローチ 伝世品の観察と国内の出土資料の検討」(『野村美術館紀要』第五号、一九九六年)、五〇—七七頁。
- ・鈴木裕子「日本出土の磁州窯系陶器」(『李秉昌博士記念 韓国陶磁研究報告』一四、二〇一二年)、八〇—八九頁。
- ・田上勇一郎「中世1 博多遺跡群 中世国内最大の国際貿易港」(『福岡史市資料編 考古2』二〇一〇年)、六八—一七〇三頁。
- ・田中克子「磁州窯系陶器について」(『太宰府天満宮Ⅲ—第3・4次調査— 太宰府市の文化財』第二六集、一九九五年)、四六—六八頁。
- ・徳留大輔「宋元時代における福建陶磁と東アジア」(『李秉昌博士記念韓国陶磁研究報告』九、二〇一六年)、六〇—七一頁。
- ・長谷部楽爾『磁州窯 陶磁体系39』(平凡社、一九七四年)。
- ・長谷部楽爾『磁州窯』(平凡社、一九九六年)。
- ・堀内秀樹・鈴木裕子「日本出土の中国明清時代の陶磁器」(『陶磁器流通の考古学

日本出土の海外陶磁』高志書院、二〇一三年)、一五五—一七六頁。

- ・馬小青(訳 齊藤龍一)「磁州窯の様々な装飾技法とその製作時期」(『白と黒の競演—中国磁州窯系陶器の世界』 大阪市立美術館、二〇〇二年)、一五九—一七〇頁。
  - ・水野哲郎編『祇園遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査 熊本県文化財調査報告188』(熊本県教育庁教育総務局文化課、熊本県教育委員会、二〇〇〇年)。
  - ・南からみる中世の世界実行委員会『南からみる中世の世界—海に結ばれた琉球列島と南九州—』(鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇一四年)。
  - ・森達也「磁州窯系陶器生産地の分布と展開」『東洋陶磁』三三、二〇〇四年、三〇—三九頁。
  - ・森達也(a)「中国唐宋元時代の陶磁生産と海外輸出」『陶磁器流通の考古学』(高志書院、二〇一三年)、六七—一〇〇頁。
  - ・森達也(b)「日本出土の中国唐宋元代の陶磁」『陶磁器流通の考古学』(高志書院、二〇一三年)、一〇一—一二七頁。
  - ・森達也「磁州窯と磁州窯系について」(『李秉昌博士記念 韓国陶磁研究報告』一四、二〇一二年)、三〇—三九頁。
  - ・森本朝子「博多出土の磁州窯系陶器と仿定器」『檜崎彰一先生古希記念論文集』(真陽社、一九九八年)、四五—四六頁。
  - ・守屋雅史「磁州窯系陶器の朝鮮半島・日本への流入についての試論」(『東洋陶磁』三三、二〇〇四年)、二九—五一頁。
  - ・李明玉(訳 荒木和憲)「高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器の状況と特徴—韓国出土品を中心として—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二三、二〇一一年)、三三—三三八頁。
  - ・八重樫忠郎「平泉遺跡群出土の貿易陶磁器研究の2000年以降の新研究と新発見について」(『貿易陶磁研究』No.43、二〇一三年)、二〇—二七頁。
  - ・山本信夫・八重樫忠郎「平泉町倉町遺跡の輸入陶器壺類について」(『陶磁器の考古学』第一四巻、雄山閣、二〇一二年)、一九三—二〇二頁。
- 中国語(ピンイン・アルファベット順)
- ・北京大学考古学系、河北省文物研究所、邯鄲地区文物保管所編『観台磁州窯址』(文物出版社、一九九七年)。
  - ・陳万里「調査平原、河北省古代窯址報告」(『文物参考資料』一九五二年第一期)、

五六―六二頁。

- ・陳万里、馮先銘「故宮博物院十年來对古窯址的調查」〔故宮博物院院刊〕一九六〇年第二期)、一〇四―一三〇頁。
- ・磁州窯博物館編『宋元磁萃・磁州窯冶子窯址出土器物与研究』(科学出版社、二〇二一年)。
- ・馮先銘「河南密県、登封唐宋古窑址調査」『文物』一九六四年第三期、四五、四七―五五頁。
- ・馮先銘、李輝柄「故宮博物院藏 中国古代窯址標本 卷一 河南卷(上)(下)」(紫禁城出版社、二〇〇五年)。
- ・馮先錡「故宮博物院藏 中国古代窯址標本 山西 甘肅 内蒙古」(故宮出版社、二〇一三年)。
- ・郭学雷『明代磁州窯瓷器』(文物出版社、二〇〇五年)。
- ・杭州市文物考古所『臨安城遺址考古發掘報告 南宋御街遺址 上・下』(文物出版社、二〇一三年)。
- ・劉涛「『磁州窯類型』幾種瓷器的年代與產地」〔故宮博物院院刊〕二〇〇三年第二期(一〇六期)、五六―六九頁。
- ・馬小青「磁州窯瓷器裝飾藝術賞析」『收藏界』(二〇〇五年第一期)、七二―七四頁。
- ・秦大樹、李凱、郭三娟「磁州窯考古与研究的百年歷程」〔文物春秋〕二〇二一年第六期、二〇二一年、三二―三四頁。
- ・葉喆民編『中国磁州窯(上・下)』(河北美術出版社、二〇〇九年)。
- ・朱勇偉、陳剛『寧波古陶磁拾遺』(寧波出版社、二〇〇七年)。

〔図版出典〕

表1、図1 筆者作成

図2―15 出光美術館

図16 筆者撮影

図17 徳川美術館(画像提供 徳川美術館)

附図1―8 各報告書より転載。ただし、森本一九九八、鈴木二〇二二から転載した図版もある。図出典については附表に示す通り。

〔謝辞〕

本論をまとめるにあたり、下記の方々より多くのご教示を賜り、また資料調査および文献収集に際して多大なるご配慮をいただいた。末筆ながら、ここに記して深く感謝申し上げます。

(アルファベット順・敬称略)

浅井正悟、梶山博史、小林仁、洪捷憶、金立言、劉海宇、三笠景子、森達也、白川宗源、孫新民、鈴木弘太、高木大輔、田中克子、王建文、山田正樹、建長寺、徳川美術館

本研究は、科研費 [P25K00538 JP 23H00018] の成果の一部である。

# A Study on the Circulation and Transmission of Northern Chinese Ceramics in Japan —Focusing on Products from the Cizhou Type Ware

TOKUDOME, Daisuke

The importation of Chinese ceramics into Japan began in earnest around the 9th to 10th centuries. Influenced by trade routes originating in Southern China, ceramics from southern kilns such as Jingdezhen, Longquan, and Fujian dominated the market. However, ceramics from northern China—such as Ding, Yaozhou, and Cizhou kilns—or those influenced by their techniques, also circulated in significant quantities. This paper examines the circulation and reception in Japan of such Northern Chinese ceramics, particularly products of the Cizhou type ware.

Products of Cizhou type ware have been excavated from sites across a wide area, from Okinawa to Tōhoku, spanning the late 11th to the late 17th century. A characteristic feature is that the sites where they are found are predominantly those with an upper-class character, such as the residences of nobles and *samurai* warriors, and temples. In terms of vessel types, jars (and large jars) are the most common, followed by bottles and basins. This composition differs significantly from southern Chinese ceramics, which feature many bowls and plates. The prevalence of 14th-century jars is particularly noteworthy. These were initially imported as containers for export goods, then used as storage vessels or ritual implements. Later, they were passed down as tea utensils, such as jars used in the tea preparation room. Additionally, some bowls and dishes from the 15th to 17th centuries were used as *matcha* tea bowls. However, the designs characteristic of the Cizhou type ware were not recognized as Chinese in Japan at the time; instead, they were understood as products from the Korean Peninsula, referred to as “E-Gōrai (Painted Goryeo).”

As described above, the reception of Chinese ceramics in Japan centered on southern Chinese ceramics, forming the concept of *karamono* (Chinese goods). However, the limited quantity of ceramics from northern China were also recognized as precious imported goods. At times, they were not even considered Chinese products, occupying a distinct position separate from southern Chinese ceramics.

出光美術館研究紀要 第三十一号

(二〇二五年度)

二〇二六年三月二十五日

公益財団法人

編集  
発行  
出光美術館

東京都千代田区有楽町一丁目九一四  
電話 〇三―三三二二―三一九四〇二

制作・印刷  
東洋美術印刷株式会社